





言葉通り、「この身になりますように」とい  
なげに応答しました。

「マコヤにすれば、到底理解し難い事態で  
す、それでもなお、「お言葉通りこの身」  
になりますように・・・」とわが身を主「主  
ねながら、われ知らぬ未知の世界へと第一  
歩を踏み出しました。

「アブル書11章8節には、「アブラハムは、  
受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこう  
むった時、それに従い、『行く先を知らない  
で』出て行った」(「アブル11:8」とあり  
ます。しかも、それは、アブラハムだけで  
はありません。それから後に続く多くの信  
仰者たちもまた、時に戸惑い、時に疑いを  
はさみながらも、なお、「行く先を知らない  
で」第一歩を踏み出したのです。

「信仰とは、望んでいることがらを確信し、  
まだ見ていない事実を確認することであ  
る」とありますが、「こうした」行く先を知  
らないで「踏み出す」歩があります。

「信仰とは一種の賭けである」とは、かの  
有名な数学者の「パスカル」の言葉です。  
イチカバチかではありません。御言に人生  
を賭けるのです。いえ、ならに、信仰とは  
「冒険である」・「アドベンチャーだ」と言  
った人がいます。

振り返れば、まきくへ、わが生涯にも「行  
き先を知らずに」「ただ御言と聖霊との示  
しを受けて、未知の世界に踏み出した、あ  
の沖繩への第一歩がありました。

「お言葉通り、「この身になりますように」  
と応答したマコヤの年齢ですが、おやのへ  
15歳前後であると言われました。

「この身」なSεβασην「Let it be to  
me according to your word」(ZK77)  
一、「Let it be」は、「そのまま」・「な  
されるまま」との意です。

それまでいい加減な礼拝出席をしていた  
人が、突然、キリストを信じることを告げて、  
周囲を驚かせたことがあります。それがい  
い加減な気持ちからではないと分かれれば余  
計周囲は驚きます。しかし、こうした不思  
議なことが、教会ではたまに起きます。も  
しかしたら、わたしたちの気づいていない  
所で、主なる神から、「キリストの霊を宿せ  
れたのではないか」、「聖霊により産みださ  
れたのではないか」と思われることがあ  
ります。

「胎内にやどっているものは、聖霊による  
のである」(タチヤー:200)と、御使いは  
ヨセフに対して言いました。ならに、マコヤ  
に対しても、「聖霊があなたの上に臨み、い  
と高き方があなたをおおいます」(ルカ  
1:35)とも言われました。

クリスマス季節に、多くの者は「処女降  
誕」に目を向けます。しかし、福音書はイ  
エスが誕生したのは、「聖霊による」という  
ことを強調しているのですが、大半はそ  
こ「目が向きません。救い主イエスの誕生  
は、終始、聖霊による秘儀でありました。聖

霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます」と言われた時、当のマリヤは「どうしてそんなことがありましょう」と途方に暮れました。当のマリヤが戸惑ったとすれば、わたしたちが戸惑うのも当然です。

「おれは絶対にキリストなど信じない」と公言していた人がいました。しかし、その彼が教会に足を運んでいるうち、献身を促され、神学校に入学してきました。「絶対神など信じない」という人の言葉は、信じてはならないと思われるのです。

ひとたび、聖霊がその人に臨むなら、神の側に何一つ不可能はありません。わたしたちは、こうした圧倒的な、神の御業にマジ伏されなくてはなりません。

ついに、マリヤは言いました。「わたしは主のはしめです。お言葉とおおり、この身に成りますように」(ヨハネ8:12)と自らすすんでを主に明け渡しました。

しかし、このすすべては、「万軍の主の熱心がこれを成し遂げられた」(イザヤ9:6)のことです。神の御業が実現するところ、そこには、必ず万軍の主の熱心があります。

(4)  
さまざまなキリスト教の文書や論文を見れば、「聖霊がわたしの宿」などの箇所をそれぞれが苦心して解説しています。しかし、処女降誕を確信を持って解説している書物

は少ないと思われます。何か、何処かで、口ごもりながら、弁明・弁解に努めている感じがします。これほど、不合理、不自然なことはありません。現代人のあなただかとしては、到底信じられぬことでしょうが・・・など、先ずは、弁解しながら、それでも、本当の意味は・・・と躊躇しながら、遠慮がちに説明しているように思われます。

30年になりましたが、「現代のアレオパロス」(1973)の書物の中で、「処女マリヤより産まれた」ということを、牧師さんはもっと確信をもって語る必要がある、と率直に言われたのは「森有正さん」です。森有正さんは、森有礼の孫です。国際基督教大学の教授、日本では、パスカル研究家として有名な方です。二人の牧師と森さんとが鼎談(ていだん)し、まとめたのが「現代のアレオパロス」です。

その中で、森さんは、「大変ファンタマル(根本的)な言い方をしますが、『処女マリヤより産まれた』と言っているのは、人間の作意であるとか、マリヤが誰かと密通して産まれた私生児であるとか、そういうことが成り立つとしたら、キリスト教信仰は全部崩壊します。僕は、マリヤが昇天したことは信じません。しかし、使徒信条は真面目に信じています」と明言しています。

信仰の事柄を説明するのは、森さんは、「経験の中」・「経験の外」という表現を使

に分けています。われわれの経験の外から、神の経験の中から、救い主の誕生は、私達の歴史の中に入り込んでくださったことであると強調されています。こうしたことは、自分の経験の範囲で、処理も理解も出来ないとも言います。だから、始めに私達の信仰があつて、それで信仰が成り立つというものではなく、先ず、イエスの処女降誕の事実があつて、始めて私達の信仰が成り立つのだと言います。

哲学者の言うことですから、なかなかわかるようで分かりません。しかし、それでも、何となく分かる部分もあります。私達は、うっかりすると、自分が信じてあげるとか、あげないとか、まことに不謹慎なことを平気で口に出します。信じてあげない、神さまも、牧師さんも、大いに困ると思つておられるかもしれません。しかし、そんなものなのでしょうか？

実は、神のお立てになつた救いの計画は、私達が信じようと、信じまいと、欲しいやうが、欲しまいが、全人類に救いを歴史の中に打ち立てられました。それは、人の立てた証ではありません。神の証です。神が私達のために証して下さつた証であるのです。それは「神の秘義」と言つてかありません。何故、「秘義」と言えは、キリストを十字架に付けるほど罪深い人間が、「もはや罪人ではなから」とわれ、「義人」と励む「おぼやかし」を「おぼやかし」と

まざれているとすれば、これは、人知をはるかに超えた「神の神秘」と言わざるをえません。それは、「無」から「有」を創り出すほどの力に満ちた神の御業であり、秘儀であります。その神の証のスタートが、「主は聖霊によつて宿り、処女マリヤより産まれ」との告白であります。

マリヤは口を大きく開けて「主の言葉は必ず実現すると信じ受け取った私たちはなんと幸いなことでしょうか」、「わがたまひは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはのために、目を留めてくださったからです」。わたしたちもまた、こうマリヤと共に叫ばねばなりません。「わたしは主のはしため（注意：男性の場合はしもべ）です。お言葉とおりの身になりますように」。

【祈ります】

天のおとこさま。御言の約束を信ずるものとならせてください。聖霊のお力がなければ、それは叶わないと知りました。主よ、この不信なわたしをあわれんでください。

主の名により祈ります。「アーメン」